

平成の終わりだし伝説
の平成のアイドルをガ
チ推ししてた少年の話
を書こうと思って5分で
挫折した話

エステバリス

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

タイトルそのまんまなんじやーい!!!

目次

S A G A B パ ー ト	I C A N B E S O M E B O D Y	S A G A A パ ー ト	I C A N B E S O M E B O D Y
13		1	

I CAN BE SOMEBODY SAGA PART

前回のゾンビランドサガは！

アルピノのライブ前に記憶喪失になっちゃったさくら！ ゾンビになる前の記憶が戻ってゾンビになってからの記憶がなくなっただけでアイドルやらないとか言い出して幸太郎さんと衝突していたけどフランシシュの皆の説得を受けてなんとかライブ当日までに踊りも歌もマスターしていざ本番！

でも本番になって急に大雪しんしんでアルピノガラガラ！ ライブ会場もボロボロになってもうダメー！ ってなったけど、皆の友情パワーでライブを最後までやりきってさくらもフランシシュもファンン皆ももうウルウルのウル！

これからもさくらはフランシシュの皆と一緒にがんばるけんね！ おー！！



フランシシュのアルピノでのライブは佐賀の地方新聞で一面を使って報じられた。

曰く、ライブステージの倒壊に遭って尚ライブを続け、来場者全ての心を鷲掴みにし

た熱い地方アイドル達、と。

曰く、崩れたステージから一人、また一人と這い上がるその姿は暫く前に佐賀の一部で出たと噂のゾンビイの話を彷彿とさせるものであった、と。

評価は様々であれ、フランシユシユのアルピノライブは概ねがステージの倒壊の中立ち上がった不屈のアイドル精神の持ち主だった、という好意的な物。

それは名実ともにフランシユシユというアイドル達が作り出す伝説の、大きな始まりであつたに違いない――

それはともかく
閑話休題。

佐賀県、某高校。

2018年の冬を終え、季節はいよいよ春を迎えようとしている頃。

「おい――！はしめ お前まだあのライブ映像見とらんと!?」

片手に一枚のディスクを持った、一人の男子高校生が彼を呼び止める。

「……いや、いいよ。俺ライブっていうの苦手なんだ」

呼び止められた少年は気だるげに、呼び止めた少年を拒絶する。

彼は目が死んでいた。

「そげんとこ言うなよ！ がばい凄かったとよ!! もうあれ伝説とよ!! 地元新聞でも一面取つとつたんだって！」

「いいよ俺は！ もうライブなんて見ないんだって！」

心底から嫌がるように拒絶する少年。その目は死にながらも、確かな活力と信念を以て『見るものか』という強い意志を感じさせる。

対してディスクを持つ男子高校生もまた、『絶対に見せてやる』という確固たる決意を宿し、彼を高校内のコンピュータ室へと連れ出そうとしている。

このディスクの前身であるライブを意地でも見せてやるつもりだ。教師の許可なく。「一回だけ！ いっぺん見るだけでいいんやって！ それ見てなんにも思わんかったらもう誘わったりせんから！」

「一回たりとも見るか！」

「本当に！ なんでもいう事いっぺん聞きやすわ！ だから見てくれん!?!」

その言葉にピタリ、と抵抗の手が止まる。

二人は八年来の友人だからわかることなのだが、この男子高校生は嘘を吐かない。特に約束については相当に義理堅い。

その彼が言う事をなんでも一度聞く、とまで言った。ならばこれは、少年にとって『いい事』を突き付けられるかもしれないチャンスでもある。

「……本当にか？」

「本当の本当！ いう事聞くから見て！」

「……わかった」

こうして、『絶対に見るものか』という少年の鋼鉄の決意はものの十数秒で瓦解した。
「で、なんのライブだよ」

コンピュータ室にて、無断でパソコンを立ち上げて件のディスクを投じる高校生を見ながら少年は問うた。

「フランシユシユっていうアイドルのライブ」

「腐乱臭衆？」

「ちげーわ。これ買った時近くにおったデスメタルのオツサンが似たようなこと言っ
とったけども」

少年の言葉に応えながら、彼は音量やら画面サイズやらを弄る。やがて真っ黒に染
まっていたディスクの映像が色を得て行き、そのライブ映像を映し出す。

「一、お前の母ちゃんに聞いたんだけど。お前佐賀に来る前にアイドルの追っかけ
やつとたんやる？ その話聞いた時、『なんでそげんこと』って思ったけども、よくわ
かったわ。」

だからお前といっぺんライブ行ってみたいなあって思ったとよ」

「……はア」

少年は物憂げに、大して興味もなさげに答える。そして映像が確かな色彩を伴い、ス

ページに立つ彼女たちの姿を、しっかりと見た。

「……………え？」

瞬間、少年は絶句した。

ライブ映像のセンターから左。花が咲いた紺色のショートカットを見て、彼は絶句した。

「……………は？」

「ん？ どげんかしたか？」

彼の言葉も、少年には届かなかった。

少年の視線も意識も、確かに映像の中の『彼女』ただ一点にのみ向けられて、少年の見て、聞く世界には『彼女』以外の人間が存在していないに等しかった。

「……………愛、ちゃん……………？」

少年は、アイアンフリルの水野愛が推しメンだった。

I C A N B E S O M E B O D Y S A G A

少年の名は尾張^{おわりはじめ}一。AO入試で同級生達よりも一足早く受験戦争を終えた18歳の

高校三年生。彼の生まれは東京。出生時刻は2000年12月31日、午後11時59

分59秒。

20世紀が終わり、21世紀が始まるから一と名付けられた、誕生日が狙いすましかのような時刻と日にちであること以外は得に珍しくもない少年である。

家族構成は父、尾張昭あきひろと母、尾張和なづみ。それと双子の姉である尾張二愛にあの四大家族。姉が『先に生まれたのに私が2なのが納得いかない』とごねていることを除いて至って良
好な家族関係。

東京で生まれ、東京で育った彼は6歳の頃、一人の少女に一目惚れをしたのだ。

少女の名を水野愛。当時一斉を風靡したアイドルユニット『アイアンフリル』の中心人物である。

馴れ初めは週刊少年サ○デーの巻頭カラーを飾った彼女の制服グラビアを見た瞬間。

あまりにも真っ直ぐな瞳、少しふんわりとした短い髪。なんかよくわからないけど頭に咲いてる花。一挙手一投足でアイドルの誇りを体現するかのような姿をグラビア一枚から感じ取った一は、気付けばCDショップでアイアンフリルの、特に水野愛がセンターを飾る曲を購入していた。

まあ、そんなわけで尾張一という少年は水野愛ガチ勢である。ガチで推していた。なんなら家族が引くくらい推していた。

しかし、尾張家はアイアンフリルが平成の00年代のトップアイドルの座を不動のも

のとしたまさしくその瞬間に水野愛が落雷で死亡した事件の後を追うようにして、佐賀へと昭の仕事の都合で引越すことになった。

そうして一が佐賀に来て9年、佐賀は今、熱かった——!!

『皆さん!! 今日もフランシユシユのライブに来てくれてありがとう!』

1号、とファンに呼ばれる少女が声を張る。どうやら彼女はリーダーではないらしいが、1号という肩書きや重要な語り口からして、彼女がこのユニットの中心人物となっていることはアイアンフリルの実質的なリーダーであつた水野愛を長年追つていた一にはすぐわかつた。

なおフランシユシユのリーダーは2号らしい。1号がリーダーじゃない辺りに拘りを感じる。

そんなこんなでチエキチエキしていく。一のお目当てはあくまでも水野愛に瓜二つな3号だが、銀髪の4号だけはチエキ禁止で、代わりにブロマイドを——というカタチで進むらしい。

「随分と、昭和チックな……」

「ん? わり、もしかするとフランシユシユのライブば初めてやと?」

「え? あー……はい。この前のアルピノライブの話を行ったっていう友達に聞いて」

「ほーお! よかよか! そいなら不思議に思うのも無理ありませんか!」

一の後ろに並んでいたデスメタルな恰好をした二人組が丁寧に教えてくれる。

曰く、あのブロマイドの少女。4号はチエキを個人的にお断りという方針を取っているという、時代錯誤なスタイルを貫き通している、良い意味での古さを特徴として持っているらしい。

そんなスタイルを貫く彼女に周囲が何かを感じ入ったのか、フランシユシユでも彼女は強い人気を博しているらしく、チエキでの列が一番長いということもザラではないらしい。

「確かに超の付く美少女だ……愛ちゃんには劣るけど」

ついでに一は超の付く水野愛マジ推しである。

そしてチエキの列は前へ、前へと進んで行き、いざ一の番。

「今日は来てくれてありがとう！」

水野愛³に似てる娘^母が目の前にいて、一はいやに緊張した。

別にアイドルとチエキなんて初めてじゃない。だけれども目の前にいる彼女の存在が、一の心臓をドクン、と鳴らしていた。

——水野愛が死んだあの時から、一の人生は死人のようなものだった。生きているが、死んでいる。生き甲斐を無くした彼の9年間はまさしく、ゾンビという呼称が一番似合う。

「え……つと」

ドクン、と鳴った心臓の音。

何かを言おうとしていたわけではない。ただ、チエキというすぐ近くまで接近できるチャンスで、彼女の顔を見てみたかったのは事実だが。

「どうかしましたか？」

「……っ」

詰まる言葉。そもそも、身体が硬直している。

もしかしたら、彼女は水野愛の生まれ変わりで。一のような、水野愛の死に生きる力を見失ってしまった人達を励ます為にまたアイドルになってくれたのかもしれない。そんな想像をしてしまう。

「……あのー！」

「はっ？」

彼女はじつと一を見ている。

この行動が後がつつかえる大迷惑行為だとわかっていているためか、一は早く何かを言わなきゃという想いと、何も出てこないという現実。それと水野愛への迸る感情がないまぜになっいて。

「す、好きです。愛ちゃん」

「……………!? ……あ、ああ……………ありがとうございます?」

一は、ドルヲタとして最低の言葉を発してしまった。



結局、一はそれから3号と、後ろにつつかえていたデスメタルおじさんに謝ってチエキすら忘れて会場からそそくさと出て行ってしまった。

「お、おとおおおお俺はなんて事を……………! 推しと推しに激似の人を知ってて見間違えた挙句、待機列を待たせてその上大迷惑を被らせるなんて!」

後悔後先なんとか。新たなるトラウマをご進呈。

「……………でも、本当に愛ちゃんそつくりだった……………いやそつくりなんてもんじゃない。あの子は、愛ちゃんそのものだった」

ふと、一は初めて水野愛を直に見た日の事を思い出す。

あれはアイアンフリルの都内ライブチケットが満席余裕というぐらいの知名度を獲得しはじめた頃の話。偶然、初めて応募したチケットの立見席が当たった時のこと。

親について来てもらって観たライブはとにかく煩かった。マイクの音量も、熱狂するファン達も。そして、水野愛が魂と誇りを込めて躍り、歌う姿を目の当たりにして高鳴る心音も、何もかもが煩かった。

熱い、熱い夏の思い出だ。

それから一は幾度となくアイアンフリルのライブに赴いて、観て、観続けた。その度に水野愛という少女に焦がれていくのを感じた。

『今日も来てくれてありがとう』『今日は来てくれてありがとう』『皆の応援があるからアイアンフリルはこれからも頑張れる』それらの言葉は、アイドル大戦争の仕組みを知らぬような年齢でもなかった一には、とてもチープに聞こえるハズの言葉だった。

それでも、一は水野愛の生声と心を煩くする感謝を聞く為にライブに通り続けた。

『愛ちゃーん!!!』 ほ、ほーっ、ほああ!!! ほああああああ!!!』

そしてもの見事に年齢一桁だった一はアイドルという概念の沼へと沈んだ。

時に、まるで関係ないがA○B48のゲームを御存じだろうか。AK○48メンバーから推しメンを選んでハッピーエンドにする、というゲームがある。

そういうゲームもアイアンフリルにはあった。アイドル戦国時代の勝者であるアイアンフリルにはそんなこともできた。当然一もこれを買って水野愛単推しを貫き通した。まさしく専門教育の領域だった。

「……あのゲームまだあったっけ……確か引越す時に売った気が……」

水野愛が死んだショックで売ったゲームは彼女の死が話題を呼び、プレミアで売れたのを覚えている。

携帯のネットショッピングを調べたらまだプレミアが付いていてげんなりした。そ

して鳥栖付近を駆け回って買い直した。

I CAN BE SOMEBODY SAGA B PART

結局はじめはフランシユシユのライブを見ることをそれ以降はやめてしまおうと考えた。9年のドルヲタブランクなど言いわけにもならない醜態を晒してしまったのだ。穴があつたら入りたいなんてものじゃない。

「愛ちゃん……アイちゃん……」

なにより彼女は水野愛にそっくりすぎて心が折れる。心の力になると同じくらい折れる。

「……でもなあ。チエキの時も、ライブの時も感じた心がバつと燃えるような感覚が……」

あの感覚をもう一度確かめたいという自分がいることも事実だ。あとなんやかんや水野愛そのものの彼女の顔を見たい。生で。

無気力だった一が『これをしたい』と確固たる目的を見出したことは、彼にとって大きな一歩である。

ただ肝心の一自身がそれを認識していないだけで。

『おい一エー！ 風呂空いたぞ！』

「……んー。皆先入つてく。俺ちよつと愛ちゃんとデートしてるから」

『……お母さん！ お父さん！ 一が9年ぶりに壊れた！』

こういう悩みをゲームやりながらしてなければ完璧だったと思う。



他方で、サガのどこぞに居を構えるフランシシュメンバーの家。あるいはゾンビイ屋敷。

やつぱりというかなんというか、その日は奇行をやらかした一と愛の話で持ち切りになつていた。

「……どう、思う？」

「告られたつっ一話だよなあ。つーかこれ、愛のこと名前で呼ばれたんががばいマズかとやな」

彼女達はまさしくゾンビである。過去に死んで、彼女らのプロデューサーを名乗るよくわからない男、異幸太郎の手によって蘇った。

つまり、一が告白した³号は本当に水野愛だった、というオチ。一的には愛があんまりにもアイアンフリルの水野愛を想起させるレベルの実力を見せつけたことと、一が気

持ち悪いくらい水野愛が大好きだったことが問題だけなのだが、一の事情も一の困惑も知らない彼等にとつてはそんなもの勘定に入れる余地すらない。

「いつかはリリイのお父さん以外にも元々の私や純子のファンが来るって思ってたけど……まさかこんなに早く来るなんて思わなかったわ」

「ですわ……」

彼女達がアイドルユニットとして発足した時から幸太郎から再三に念を押されていたが、彼女達はかつて死んだ人間だ。仮に一のような一般市民にゾンビということがバレてしまえば、それはもう色々とただ事では済まない。

なので、大問題。過去にこの手の問題と直面したことはあるためノウハウがないわけではないが。

「顔は覚えてるから、今度またライブやイベントに顔を見せたら私なんかかするから安心して」

愛はそう言いながら布団を敷き出す。時間は現在午後10時30分。ゾンビである以前に年頃の少女である彼女達にはお肌のダメージは欠かせないのだった。



あくる日。一は佐賀県鳥栖市のとある定食屋に居た。

佐賀県は親子丼も有名で、有田鶏の美味さは特に筆舌にしがたいものがある。文字化

するとすれば、やはり鶏肉鳥有の臭みがないことだろうか。ハーブをキメて育った鶏である。無論最高に美味しい。唐揚げも親子丼も最高なのである。

「はあ……」

が、だからといって、そんな最高の食事をしていても気分が晴れるわけではない。美味しいものはあらゆる悩みを解決し得る最強アイテムであることは事実だが、その最強アイテムである鳥栖の有田鶏のから揚げ&親子丼の魔力でも一の水野愛ノスタルジーは解消できなかった。

一の目の前にある親子丼はその半分の量も食べられてはおらず、心此処に在らず、といった風に伴のゲームで水野愛とラブロマンスを繰り広げていた。

「……愛ちゃん……」

気持ち悪かった。一はライブ以降口を開けば愛ちゃん愛ちゃんと、ストーカーみたいなことばっか言っていたのである。

ガラリ、と定食屋に誰かが入ってくる音がする。現在時刻は午後12時30分。席はほとんど埋まっている。

「——お隣、失礼します」

ただ一つ、一の隣の席を除いては。

一の隣に座ったのはスーツの男だった。蝶ネクタイと赤いベストにマントのように

着こなした薄手のジャケット、そして目が全く見えなくらいに真つ黒なサングラス。控えめに言って食堂とは不釣り合いな恰好だ。

「ああ、どうぞ……」

男は一の隣に腰掛けると、一通りメニューに目を通してから有田鶏のから揚げと親子丼。それに焼き鳥を頼んだ。

暫くの間、彼は無言で『ゾンビでもわかるマネジメント術』なる本を読んでいたが、少ししてゆっくりと口を開いた。

「……差し出がましいことを言うようだが少年。親子丼が冷めてしまうぞ？」

「え？ ……あー、そうですね……でも、食欲湧かなくて」

「ふむ……」

男はパタン、と本を閉じる。話し掛けてきた男に目も向けず、ゲーム^{2, 5}の中の水野愛と恋愛を繰り広げている一を、困ったもののように見つめている。

「……何かあったのか？」

「初対面の人に話すような話でもありませんよ」

「それもそうか」

ばったりと、二人の話は止まった。それから暫く時間が経つと、男の席に彼が注文した親子丼、焼き鳥、唐揚げが姿を現した。

「…………ふむ」

男は一通り並んだ定食に一瞥すると、勿体ぶったように一に視線を移す。

「少年。キミが何に悩んでいるかは俺にはわからん」

「……………？」

口に親子丼を含む。勢いよく食べたりはせず、行儀を良く作っている。

外面は大事、ということなのだろうか？

「二度何か日記のようなものに自分の感情を書き連ねるといい。相反する本音も全て、書くんだ」

案外アツサリ、整理がつくかもしれないぞと食事を続ける。

「一度冷めたものを暖めても、暖め直しはブランクができてしまう。以前のようには実直になれないこともあるだろう。」

だが、仮にそうしたことで整理がついたのならそれでいいじゃないか」

ネギとラー油を親子丼にかける。「おお、初めてながらなかなか美味そうだ」と呟くと、男はそれをなんの躊躇いもなくばく付く。

「ぬっ……………」

一口食べて、箸が止まる。サングラス越しでもわかる明らかな同様。

（う、うまーっ！ ありたどり特有のアツサリとした臭みの無い味にネギの甘味と

しやつきり感、そして何よりラー油の辛味が奇跡的な噛み合わせを見せているんじゃない……!!)

少々ラー油をかけすぎてしまったらどうか、男の舌は辛味の危険信号を出していた。(だが！、この辛味がネギの甘味と溶け合って口と手を進める気にさせてくる！)

いかんぞ……これはいかん！ 唐揚げにもラー油をかけたくなる！)

男は感情のままに暴食を始める。ラー油アリとラー油ナシ、それぞれの味を存分に楽しみ、鶏肉が更なる鶏肉を加速させていく――

(これはよくない。死ぬほどアルコールを求めてしまいたくなる！ 鳥栖から唐津は電車を使っても二時間余りの時間を費やしてしまう距離、ここで酒を飲んでしまうわけはいかん！)

男は断腸の思いでアルコールのないサガのおいしい水を飲むことによつて自制心を働かせる。一心不乱に鶏、鶏、鶏に立ち向かい、やがてその器も、皿も空にしてしまった。

「少年、感情に整理がついたのなら見方や考えを、何かを使つて変えてみるといい。」

キミの心に居着く停滞を良しとする感情も、それを受け止めて新たなる道へと向かわんとする感情もまた、キミだ」

「……あの、貴方は……」

「俺はただのしがらないアイドルプロデューサーだ。存在そのものが風前の灯となったサガを救う、ただのプロデューサーだ」

男はそう言うのと、代金を払って立ち去って行った。

残された一は彼が使ったラー油の保存容器と自分が食べ残している親子丼を一瞥して、ラー油をかけて食べ始めた。

「……辛っ」

一人目のガチ推しへの想いに踏ん切りをつけて、二人目のガチ推しを始めようと思つた瞬間だった。



これは決して、アイドル達の物語ではない。そして別に、過去に囚われた少年が踏ん切りをつけるとかそういう大した話でもない。

「今日もライブに来てくれてありがとう！ それじゃあチエキの方を……あ」

「あ、その……この前はごめんなさい。3号さん」

ただ、謎のアイドルプロデューサーがサガでグルメ歩きをする話に偶然一人の少年がかち合っただけの、伝説のアイドル達がサガを救う物語の、ひよんなことから彼女達を推すことになった少年の片隅の出来事である。

「3号さん、フランシシュの皆さんと頑張ってください。応援してます」

「うん。私達で伝説の令和のアイドルグループになってみせるから、応援してて」
その日、彼もまた伝説を生む彼女達のファンになったのだった。